

宋代禪と湖南省

長谷川 昌 弘

はじめに

平成五年三月、愛知学院大学中国仏教文物考察団は、鎌田茂雄博士を団長に湖南省の仏教遺蹟を調査した。限られた時間内ではあったが、調査地は瀉山靈祐が化を張った大瀉山、葉山惟儼が住した岳麓山、石霜慶諸が法門を興した石霜山、そして中国五岳の一つであり南岳慧思や南岳懷讓が住した衡山等々と多岐にわたり、都合二十数ヶ所に及んだ。

元来湖南省は中国中南部に位置し、洞庭湖の南方にひろがる山紫水明の地域であるが、唐代禪発展の拠点の地でもある。また一方で宋代禪宗史においては以後の教団発展を

宋代禪と湖南省（長谷川）

占う重要な地域であろう。

小論では右の観点から、今回の調査地のいくつかを抽出し、宋代禪宗史における重要性を考察したいと思う。

大瀉山密印寺

長沙市の西部、寧郷県瀉山郷に大瀉山密印寺がある。もともと大瀉山とは『読史方輿紀要』巻八十に、

大瀉山。県西百四十里、高六十里、周圍百四十里。草木深茂、四面水流深澗。故曰大瀉。

とあるように、四方に水流があるところから名付けられたようである。そして密印寺は『湖南通志』巻二三八に、

密印寺在寧郷県西百五十里大瀉山、唐元和中裴休奏建

賜額。

とある如く、唐の元和年間（八〇六―八二〇）に裴休によつて創建されたものである。

現在の密印寺は瀉山郷人民政府のすぐ下に位置するが、この人民政府のある小高い山が大瀉山であるという。寺は荒廃がひどいが、山門、東西の配殿、大雄峯殿、藏経閣がかろうじて残存している。しかしながら万仏殿ともいわれる大雄峯殿の内部は、一二二―一八体の磚彫の仏像が現存しておりひときわ光を放っていたのが印象的であった。

そしてこの寺で宗風を振ったのが瀉山靈祐（七七―八五三）である。靈祐の紀伝については鄭愚撰「潭州大瀉山同慶寺大円禪師塔銘并序」（『全唐文』卷八二〇）、『宋高僧伝』卷十一、『景德伝灯録』卷九等々に記されるが、これらを総合すれば、元和年間に大瀉山密印寺に入り、破仏後同慶寺にて化を張った。その結果、瀉山冲逸、瀉山如真、瀉山普潤、瀉山法真らが靈祐の法を嗣いで大瀉山に住するとともに、仰山慧寂、香巖智閑、延慶法端、靈雲志勤、徑山洪諲らが靈祐の法を各地へ拡げることとなったのである。唐代において百丈下の湖南の拠点になるとともに瀉仰宗

瀉源の地として隆盛を誇った大瀉山であったが、果たして宋代は如何なる状態であつたらうか。宋代の大瀉山に関する資料は非常に乏しいが、覚範慧洪の「潭州大瀉山中興記」（『石門文学禪』卷二一）に興味深い記述がみられる。それによれば、

崇寧三年十一月大瀉山密印禪寺火、一夕而燼。

とあり、密印寺は崇寧三年（一一〇四）火災にて灰燼に帰したのである。そしてその復興に尽力したのが、「空印禪師軾公者蓋懷四世之孫」なる雪竇下の天衣義懷四世の孫である法濟元軾である。⁽¹⁾大瀉山の中興が雲門宗の人物によつてなされた訳だが、この火災以前に住していたのは石霜楚円の法嗣である大瀉德乾、黄竜慧南の法嗣大瀉懷秀、大瀉頴詮、懷秀の法嗣大瀉祖璿、また翠巖可真の法嗣大瀉慕喆（？―一〇九五）、慕喆の法嗣で瀉山雲靄、瀉山永、瀉山齊榮等が知られる。一方で火災以後では開福道寧の法嗣月庵善果（一〇七九―一一五二）、善果の法嗣大瀉行、また圓悟克勤の法嗣大瀉法泰、仏眼清遠の法嗣大瀉法忠（一〇八四―一一四九）等が知られる。このようにみると北宋後期には大瀉山は臨濟宗、或いは臨濟宗黄竜派の拠点になって

いたと思われ、南宋期には明らかに臨濟宗楊岐派の拠点へと変化していたとみなすことができる。即ち密印寺は宋代における臨濟宗の消長と命運を符合させた寺であるといえよう。

薬山寺

常德市からバスで一時間半ほどで、津江市薬山村に到着する。ここが薬山寺の旧趾である。そもそも薬山とは『大明一統志』卷六二に、

薬山在澧州南九十里、上多芍薬。山有長嘯峯。昔僧惟儼嘗夜登山。雲開月現。大嘯一声、聞於数里。因名。

とあり、同じく卷六四に、

薬山在府城北八十里。梁以此山名県。彼為僧惟儼道場、刺史李翱曾訪之。

とあるように、薬山惟儼が道場を開いた場所である。惟儼の紀伝は唐仲撰「澧州薬山故惟儼大師碑銘並序」(『全唐文』卷五三六)、『祖堂集』卷四、『宋高僧伝』卷一七、『景德伝灯録』卷一四等に記されるが、貞元年間(七八五―八〇四)のはじめに薬山に住したのであった。

宋代禅と湖南省(長谷川)

現在の薬山寺は「僧惟儼墓塔薬山寺風景区」として、津江市人民政府重点文物となっている。一九九一年にこじんまりとした伽藍が建造され、それを記念して「重建薬山古刹碑誌」が大雄峯殿前に安置されている。かつての寺域は相当広大であったらしく、寺の中心地であった場所は現在の寺から相当離れている。またその場所には石碑が建てられているが、一部の残石であり、文章を推測するまでにはいたらなかった。⁽²⁾そこを過ぎさらに南東に進むと、中腹に「薬山惟儼禅师化城塔銘」の重建碑が半ば土に埋れながら立っている長嘯峰と呼ばれる山である。対面が虎山と称するが、文献では確認できない。今後修復の予定だそうだが、徹底的に破壊されたのは文化大革命の時であったと聞き非常に残念であった。

さて青原下石頭希遷の法を嗣いだ薬山のもとにはそれほど多くの修行者が集ったわけではない。しかし門下からは雲巖曇晟、船子徳誠、道吾圓智といった以後の石頭禅の流布に大きな役割を果たした傑僧を輩出したのである。薬山寺自体は惟儼の法嗣である薬山高や薬山夔が住したが、以後は徳山縁密の法嗣で薬山第九世となる薬山可瓊や、智門

光祚の法嗣の薬山宣、乾明居信の法嗣である薬山尋肅といった雲門宗の人物、或いは金峰従志の法嗣の薬山彦、雲居懷岳の法嗣で薬山八世となった薬山忠彦、梁山縁観の法嗣で薬山十二世となった薬山利昱といった曹洞宗の面々に護持されたのである。

これを要するに、薬山寺自体は必ずしも湖南禪宗の一大拠点とはならなかったが、開山の惟儼の法系を引く石頭下の人々によって脈々と受け継がれ、少くとも北宋代には曹洞系の寺として存在していたことは確かであろう。しかし遺憾ながら現時点では資料も乏しく、南宋代の様相については甚だ不分明である。

夾山寺

常德市の北西にある石門県の県城から約九キロメートルの位置に、「夾山寺国家森林公园」が整備中である。この森林公園こそ禅宗史上名高い夾山である。元来夾山とは『読史方輿紀要』巻七七に、

県東南三十里、周回三十里、高二百余丈、兩峯並峙故名。

とある如く、その姿から名付けられた山の名である。夾山寺の由来は唐代にさかのぼり、夾山善会（八〇五―八八一）が師の船子徳誠と師資契承の後、居を定めずにしたところ『景德伝灯録』巻一五に、

唐咸通十一年庚寅、海衆卜干夾山、遽成院宇。（『大正蔵』巻五一、三三四a）

と記されるように、唐咸通十一年（八七〇）に建立されたものである。一方『八瓊室金石補正』巻一一〇に収められた「宋夾山寺鐘款」には次のように記されている。³⁾

夾山寺即普慈寺唐時建。又云夾山在県東南三十里、古靈泉寺地。又云夾山本僧善会道場。世伝善会未入山時、荒谷無人、有周野人者、盧其中貌極兇惡、人至輒食之。師入求宿適野人外出。其妹令速去、吾兄食人。善会云、不妨。有頃周野人歸欲加害。師以水噴之、遂粘壁不得脱、野人告哀求免。師命回心。野人婦命乃釈之。今為夾山伽藍有塑像在。又師住夾山。僧問如何是夾山境。師曰、猿抱子帰青嶂嶺鳥銜花落碧巖泉。

この鐘款は宋大観三年（一一〇九）のものであるが、夾山寺の歴史を知り得る数少ない資料の一である。右の文によ

れば夾山寺はもと普慈寺と称し、のち靈泉禪院と改称した。もともと夾山善会の道場であったが、善会が人食い野人を改心させたことと、有名な「夾山人境」の問答が記されている。しかしいつから夾山寺と称したかは不明である。

現在夾山寺は大伽藍を建造中であり、山門、放生池、鐘樓、鼓樓、天王殿、大雄峯殿、大悲殿、藏經閣とすべて新しく建立されつつある。旧趾は大雄峯殿と大悲殿の間に残された清代の大雄峯殿のみである。したがって右の鐘觀が刻された鐘の存在も確認し得なかった。石刻資料も旧大雄峯殿内に、向かって右側に康熙四十年（一七〇一）の重修記、左側に道光三年（一八二三）の「重修夾山靈泉寺碑誌」が存したのみであった。この大修復事業は一九九二年九月に開始されたものであり、あと一年早く訪れることができたらと悔まれた。しかし夾山人境話にある青嶂嶺が夾山寺の裏山のことであり、それに対面して碧岩山が存し、その麓にまさに青い三個の巨岩がありそれを碧岩ということを確認できたのは幸運であった。そしてその碧岩の下に現在整備中の泉があり、圓悟克勤の『碧巖録』の名の由来とされるのが、単なる善会の美辞麗句でなく、事実非常に美し

宋代禪と湖南省（長谷川）

い嶺や岩が存在することを改めて認識できたのは、今回の調査の大きな収穫であった。

さて『景德伝灯録』によれば善会は二十二人の法嗣を輩出したが、この内湖南省にとどまったと思われるのは澧州樂普山元安、韶州曇普のみである。そして夾山寺に住したのは右の元安と、青林師虔の法嗣の石門獻蘊である。⁴しかしその後の唐代における夾山寺の様相は甚だ不分明であり、少くとも石頭下の禪の拠点とはなり得なかったと思われる。

ところで宋代になると、夾山寺に住した人物がある程度浮上してくる。石頭下では承天寶昭の法嗣の夾山省宗、夾山仁秀、靈泉用淳があり、臨濟宗では神鼎鴻誼の法嗣の夾山子英、黄竜派黄竜祖心の法嗣の夾山曉純がある。そして曹洞宗では洛浦景韶の法嗣の夾山道暹があり、雲門宗では南宋になって福昌重善の法嗣の夾山惟俊、仏日智才の法嗣の夾山自齡、そして惟俊の法嗣の夾山遵がある。さらに夾山十五代として雲蓋智本（一〇三五―一一〇七）があげられる。これは覚範慧洪の『石門文字禪』巻二九に収められた「夾山第十五代本禪師塔銘并序」より明らかである。

師諱智本。筠高安郭氏子。…中略…時曾丞相由翰林

宋代禪と湖南省（長谷川）

学士出領長沙。以礼迎居南岳之法輪。學者爭宗向之。遷居雲蓋。自雲蓋遷居石霜。凡十三年道大顯著。勸請皆一時。名公卿師既老矣。而湖北運使陳公拳必欲以夾山致師。師亦不辭。欣然曳杖而去。：中略：以大觀元年上元夕、沐浴更衣端坐終於夾山之正寢。閱世七十有三僧臘五十有二。

右によれば、智本は白雲守端の法を嗣ぎ出世したが曾丞相に請われて湖南に遷り、南岳の法輪寺、雲蓋山、石霜山と歴住するが湖北運使陳公のすすめで夾山寺へ移住した。既に年老いた智本であったが、大觀元年（一一〇七）七十三年で示寂するまで夾山に住した。

そしてしばらく後に夾山寺に住したのが圓悟克勤（一一〇六—一一三五）である。『嘉泰普灯録』卷十一によれば、崇寧中還里、省親。四衆迓拜。成都帥翰林郭公知章請開法六祖。更昭覺。再出蜀次荆南会無尺居士張公商英。以師礼留居碧岩。

とあり崇寧年間（一一〇二—一一〇六）に郷里に帰った克勤であるが、

「圓悟禪師伝」（『鴻慶居士文集』卷四二）によれば、

更住昭覺院。凡八年再出蜀。

とあり、克勤が張商英に会うのは早くとも政和年間（一一一〇—一一一七）のはじめごろである。尚且つ『嘉泰普灯録』に、

政和中、詔住金陵蔣山。

とあることから、克勤が夾山に住するのは政和年間に間違いない、恐らくは智本のすぐ後ではなからうか。そしてここで『碧巖録』をまとめることになるが、わが国道元将来の一夜本『仏果碧巖破闕擊節』には現行流布本の元刊本の「師住澧州夾山靈泉禪院」の撰号がなく、また宣和乙巳七年（一一二五）無黨による後序の、

圓悟老師。在成都時。予與諸人請益其說。師後住夾山道林。復為学徒扣之。凡三提宗綱。語雖不同。其旨一也。門人掇而録之。既二十年矣。師未嘗過而問焉。流傳四方。或致踳駁。諸方且因其言以其道不能尋繹之。而妄有改作。則此書遂廢矣。學者幸諦其伝焉。

なる文によれば、『碧巖録』は少くとも克勤が夾山でまとめたものではないことは確かである。この点については別の機会に稿を改めて論じたいが、克勤の在住は右の事情よ

り非常に短期間であったことは確かである。

いずれにせよ北宋末期、夾山寺は楊岐派の禅匠が連続して住したことは確かである。しかるに克勤の後は、法嗣の靈泉希寿が住したがそれ以降南宋代の夾山寺の様相は不明である。これを要するに夾山寺は石頭下の傑僧善会の開創にも拘らず、石頭系の拠点とはなり得ず、また宋代に到っても宗派の拠点となるような人物は住持せず、結果としては湖南における禅宗拠点にはならなかったといえよう。

石霜山

長沙市から東へ約六十キロメートル移動すると、そこは瀏陽県である。ここの金剛郷石莊村に古石霜寺が存する。

そもそも石霜山は『大明一統志』卷六三に、

霜華山在瀏陽縣西南八十里。一名石霜。其山南接醴陵北抵洞陽山。峻水激觸石噴霜。故名。

とあるように、激流が岩にあたつて霜のようにみえるところから名付けられたという。『讀史方輿紀要』卷八〇にも同様の記事がみられる。古石霜寺はもと崇勝寺といったが第一世を確定しがたい。現在の伽藍は修復中であつたが、

宋代禅と湖南省（長谷川）

大雄殿と山門は立派だがあとの建物はまだどのように修復されるかも予想できない。庵主の話によれば村人達の尊敬もなく資金は非常に乏しいとのことであつた。大雄峯殿の外側に、「重修大殿記」、「芳名記」等数本の石碑が存したが、いずれも清代のものにも拘らず保存状態は大変悪くこの寺の荒廃を物語っていた。

しかしこの石霜寺こそがかの道吾圓智の法嗣石霜慶諸（八〇七―八八八）が住して宗風を振つた寺なのである。既に先賢の研究からも明らかのように、慶諸のもとには道吾下、洞山下の者が参集し、まさに石頭下の禅の一大拠点となつたことが知られている。⁽⁶⁾慶諸以前に石霜山に住したと考えられるのは、馬祖道一の法嗣である石霜大善、百丈懐海の法嗣である石霜性空の二人があげられるが、『景德伝灯録』では慶諸の法嗣の石霜輝を第三世としており矛盾を生じる。いずれにせよ馬祖下の拠点となろうとした石霜寺は慶諸によつて大きく変化したのである。しかし石霜輝以降に石霜山の様相は詳らかでなく、このことは逆に湖南における石頭系の禅の消長を物語っているのではなからうか。

ところが宋代に入ると石霜寺はがらりと様相を変えるのである。沿陽善昭の法嗣石霜楚円（九八六―一〇三九）が入山するのである。そしてこれ以降石霜寺は臨済宗の拠点となるのである。今北宋代には汾陽善昭の法嗣で楚円の兄弟弟子である石霜法永を皮切りに、黄竜慧南の法嗣である石霜琳（？―一〇八四）、楊岐方会の法嗣である石霜守孫等が住し、南宋代には楊岐派月庵善果の法嗣である石霜宗鑑、また馬寿師観の法嗣である竹巖妙印（一一八七―一二五五）等が住したのである。このようにみると石霜寺は唐代石頭系の禪の一大拠点となるが、北宋代には臨済宗の拠点になり、南宋代には楊岐派の拠点へと変化したのである。惜しむらくは前述の如く寺の荒廃がひどく資料が乏しい点である。

岳麓山

長沙市の湘江の西岸にあり、現在は公園として人々に親しまれている小山が岳麓山である。『大明一統志』卷六三に、岳麓山在善化县西南、亦名靈麓峯。即衡山七十二峯之一。上有岳麓書院、山下有石方平土。人於此望拜南岳

名拜岳石。

とあるように、岳麓山は南岳に連なる山で深い溪谷が走り、まさに山紫水明の地である。そしてここにある寺が麓山寺である。『大明一統志』には、

岳麓寺在岳麓山上。有唐李邕所書碑。

とあり、また、

道林寺在岳麓山下。唐杜甫詩、玉泉之南麓山殊、道林林壑争盤紆、寺門高開洞庭野、殿脚插入赤沙湖。

とある。即ち山上に麓山寺があり、山下に道林寺があるのである。今回の調査では道林寺を訪れることができなかつたが、小論ではあわせて考察したいと思う。

さて麓山寺の歴史については、やはり唐開元十八年（七三〇）に李邕（六七八―七四七）が選した「麓山寺碑」が最古の資料となる。この碑は現在は岳麓山の麓の岳麓書院の左側にある。東屋に収められて保存されているが、磨滅が激しくまた碑陽のみしか見られない。文は『湖南通志』卷二六二をはじめ数々の文献に収められている。それによれば、

麓山寺者晋太始四年之所立也。

とあり、晋の太始四年（二六八）の建立である。太康二年（二八二）には法導禪師が法物を増備し、天監三年（五〇四）には刺史夏侯祥が別に正殿を構え、紹泰二年（五五六）には刺史王琳と律師法賢が涅槃像を建てた。

このように脈々と麓山寺は引き継がれるが、禪宗史上に名をあらわすのは、長沙景岑が住してからである。景岑は南泉の独特の禪風を挙揚したが、麓山寺即ち鹿苑寺が禪宗史上重要な拠点になったとは思われない。早期には石霜慶諸の法嗣である鹿苑暉が住するが、宋代に入ってから様々な人物が住するのである。例えば雲門宗では徳山縁密の法嗣の鹿苑文襲、徳山慧遠の法嗣の鹿苑圭、石霜節誠の法嗣の岳麓珪、開先宗の法嗣の岳麓海などである。臨済宗では大滄慕喆やその法嗣の岳麓海、黄竜派では黄竜祖心の法嗣の鹿苑思齊、亀山曉津の法嗣の岳麓祖曇があり、楊岐派では大慧宗杲の法嗣の岳麓梵、同じく鹿苑信があげられる。就中大滄慕喆については、『嘉泰普灯録』巻四に、岩歿塔于西山。師心喪三年。去黄檗游湘中。時謝公師直守潭。慕其名以岳麓礼迎之。とあることから翠巖可真的没後三年間服喪したことがしら

宋代禪と湖南省（長谷川）

れる。可真是治平元年（一〇六四）に没しているから、彼が岳麓山に住したのは熙寧年間（一〇六八―一〇七七）のことであろう。また慕喆の法嗣の岳麓海については、覺範慧洪の『石門文字禅』巻二九に「岳麓海禪師塔銘并序」が収められており、興味深い記載がある。

師名智海。姓萬氏吉州太和人也。…中略…崇寧乙酉遷居於湘西之岳麓。勸請皆一時名公卿。明年正月八日麓火一夕而燼。

右によれば智海が岳麓山に住したのは崇寧乙酉即ち四年（一一〇五）のことであり、翌年の一月八日に火災にあつて麓山寺は灰燼に帰するのである。その後寺を復興させたのも彼であるが、宣和元年（一一一九）六十二才で示寂した。したがって大慧宗杲の法嗣等南宋代の住持は北宋末に再建された麓山寺に住持したのである。

麓山寺は現在は山門と観音閣の他に、弥勒殿も修復されて長沙市民の憩の場となっている。しかしながら歴史的にみれば長沙という府城の近くにながら、特定の宗派の拠点とはなり得なかった。しかし北宋代に雲門宗から臨済宗の住僧が増え、南宋代に楊岐派の住持しか確認できない

ことからすれば、やはり宋代禪宗史の動向をそのまま物語っている寺であるといえよう。

ところで岳麓山下の道林寺についてはどのような状況であつたらうか。道林寺の詳しい歴史は不明であるが、『湖南通志』卷二六二にも「唐道林寺碑」の名のみがあげられている。様々な文献もその文を載せず、額字が著名な書家歐陽詢の手になることしか記さない。しかし唐代に既に存在していたことは確かである。宋代なると数名の住持が浮上する。先に夾山寺で述べた智本（一〇三五―一一〇七）がまずあげられる。塔銘には記されないが、『建中靖國統灯録』卷二〇に、

樞密曾公請住南岳法輪高台道林。晚遷雲蓋。

とあり、雲蓋山に住持する前に道林寺に住したと思われる。また短期間ではあるが圓悟克勤が道林寺に住したのは、諸伝の一致するところである。その他に黄竜派の祐聖法窟の法嗣である道林了一（？―一一一四）や、同じく開先行瑛の法嗣の道林法照、また楊岐派の月庵善果の法嗣の道林淵（？―一一五三）等があげられる。これらの諸師を鑑るに資料が乏しく断定はしかねるが、道林寺は宋代にはほぼ臨

濟宗の拠点であつたとみて差し支えないであろう。

開福寺

長沙市北区新河付近に開福寺が存する。開福寺は宋張栻（一一三三―一一八〇）が「題長沙開福寺」（『張南軒先生文集』卷六）に、

長沙開福蘭若、故為馬氏避暑之地。所謂會春園者、今荒郊中、時得博覽、皆鸞鳳之形。而奇石林立、二百年來供城中官府及人。

と述べるように、唐天成二年（九二七）沙門保寧が楚王馬殷とその子馬希範の支持で避暑地を寺として創建したのである。覺範慧洪の「潭州開福法輪藏靈驗記」（『石門文字禪』卷二一）にも、

開福在郡城之北。基構雄誇尽占形勝。昔馬氏植福之地也。弘法聚徒皆當時之望士号大叢林、名鎮諸方。と述べるように、当初から大規模叢林であつた。

北宋代には広利大師洪蘊（九三六―一〇〇四）が住し、仁宗嘉祐年間（一〇五六―一〇六七）には沙門紫珂が金堂宇を修復した。その後臨濟宗黄竜派真浄克文の法嗣である

花葉進英（?—一一二二）が住した。覺範慧洪の「花葉英禪師行狀」（『石門文字禪』卷三〇）に、

初開法住長沙之開福。十年之間、殿閣崇成。又五年棄之。翩然北游五台。徧覽聖蹟。乃南遷庵梁山。天下衲子益追崇之。政和甲午、衡陽道俗迎住花葉之天寧。

とあることから、彼は政和甲午四年（一一一四）天寧寺に住するが、少くとも十五年以上前即ち昭聖年間（一〇九四—一〇九七）頃開福寺に住持して化を張ったと思われるのである。その後開福道寧（?—一一一三）が住するのである。慧洪の「靈驗記」では、

政和之初、長老道寧開東山法道。

とあるが、『続伝灯録』卷二五では、

大觀中潭帥席公震、請住開福衲子景從。

とあり、年時に差異が見受けられるが、おおよそ大觀のおわりから政和のはじめにかけて即ち西暦一一一〇年頃入寺したのであろう。修行僧が雲集したが、道寧は政和三年（一一一三）示寂したのである。「靈驗記」によればその後、

潭帥以大長老智公黃童高弟時年九十余可嗣其席。

とあり、黃童派の靈蓋守智（一〇二五—一一一五）に白羽

宋代禪と湖南省（長谷川）

の矢が立ったが、守智は老齡をもって辞し、その法嗣開福文玉が住持したのである。その他年時は特定できないが、宋代に開福寺に住持したのは、雲門宗では薦福承古の法嗣である開福從受や開福璣、洞山守初の法嗣である開福德賢、臨濟宗黃童派では圓通圓機の法嗣である開福世逢、泐潭応乾の法嗣である開福德筠、楊岐派では圓悟克勤の法嗣である開福宣等があげられる。

これを要するに開福寺は宋代に至っておもに雲門宗と臨濟宗の拠点となるが、どちらかといえば臨濟系の寺であったといえよう。

翻って現在の開福寺は湖南省仏教協会と長沙市仏教協会が併置され、境内整備もほぼ整っている。寺内には十四の諸堂が整備されているが、遺憾ながら石刻資料の類は「紫微山古開福寺記」と「重建紫微山開福寺碑記」のいずれも清代のものが二碑存するのみである。しかしながら『開福寺簡史』を出版するなど、復興への強い願いが感じられる寺であった。

おわりに

湖南省の仏教遺蹟を調査し、改めて禪宗史上における湖南の重要性を考える時、慧洪の「重修僧堂記」（『石門文字碑』卷二一）に記された次の文が大きな示唆を与えてくれる。

湘南号為山水之國。故佳處多。為得道者所廬自唐貞元間、馬祖石頭下鄰於衡岳。學者散止巖叢。本朝康定間、慈明禪師中興於石霜、望馬祖為十世嫡孫。兒孫徧天下而長沙尤盛。元豐元祐之間、角立傑出者比比領名利。諸方指以為道之所在。今三十年禪林下衰、以大福田之衣自標識而号。分灯嗣法者例皆名愧其美。蓋族大口衆不肖之子、乃生固其所也。

右の文と前述の調査結果をあわせれば、まさに唐代の湖南は石頭下の禪の拠点であったし、北宋に至って臨済宗の拠点となったのである。そして一般に時間で限られる宋代禪宗史は北宋時代に黄竜派、南宋時代に楊岐派が隆盛したとされるが、湖南はそれを空間の上でも立証できる数少ない地域であろう。小論では限られた調査地のみを取り上げし

かも簡略な考察を加えただけであるが、宋代禪の様相の一端はとらえられたかと思う。今後は隣接地域も含め、より緻密に研究を進めたい。

注

(1) 大瀉山の中興については、既に石井修道博士が「大瀉山の中興について」（『中国仏蹟見聞記』第五集）で詳しく考察されているが、慧洪の『石門文字碑』には空印に関するものが他にも多く収められている。「大瀉山外侍者求詩」（卷六）、「謝大瀉空印禪師惠茶」（卷九）、「次韻拉空韻游芙蓉」（卷一一）、「過瀉山陪空印禪師夜話」（卷一二）、「空印以新茶見餉」（卷一二）、「瀉山軾禪師贊」（卷一九）、「普同塔記」（卷二二）等々であり、個人的に非常に親しい関係であった。

(2) 鈴木哲雄博士『唐五代の禪宗』五二頁に述べられている「慈雲禪寺碑」の可能性もある。

(3) 『湖南通志』卷二八五は全文を載せず、『金石補正』を紹介している。

(4) 鈴木哲雄博士『唐五代の禪宗』七三頁に詳しい。

(5) 柳田聖山博士は「雪竇頌古の世界」（『禪文化研究所紀要』一〇号）で、張明遠が再編する時に名前を決した可能性を指摘される。

(6) 鈴木哲雄博士『唐五代の禪宗』、石井修道博士『中国禪

宗史話』等に詳しい。また石霜山の変遷については、佐藤秀孝「石霜山の変遷とその現況」(『中国仏蹟見聞記』第五集)に詳しい考察がされている。

宋代禪と湖南省(長谷川)